

置き換えられた攻撃の誘発 (TDA) に及ぼす挑発者および 攻撃対象者の地位の影響¹

淡野 将太*

研究1では、TDA (triggered displaced aggression) パラダイムの実験手続きを仮想場面法に応用し、妥当性を確認した。研究2では、仮想場面法において、挑発者および攻撃対象者の地位として先輩、同輩、後輩を設定し、TDA に及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響を検討した。攻撃対象者の地位の主効果から、「攻撃対象者：後輩」群の TDA が「攻撃対象者：先輩」群より強いことが示された。また、挑発者の地位および攻撃対象者の地位の交互作用から、(a)「挑発者：同輩」条件における「攻撃対象者：同輩」群および「攻撃対象者：後輩」群の TDA が「攻撃対象者：先輩」群より強いこと、(b)「挑発者：後輩」条件における「攻撃対象者：後輩」群の TDA が「攻撃対象者：先輩」群および「攻撃対象者：同輩」群より強いこと、(c)「挑発者：先輩」条件における「攻撃対象者：先輩」群の TDA が「挑発者：同輩」条件における「攻撃対象者：先輩」群および「挑発者：後輩」条件における「攻撃対象者：先輩」群より強いことが示された。本研究結果から、攻撃対象者の地位が個人より低い場合に TDA を表出しやすいこと、挑発者の地位と同等の地位もしくは挑発者の地位よりも低い地位の攻撃対象者に対して TDA を表出しやすいことが示唆された。

キーワード：攻撃、置き換えられた攻撃、TDA、挑発、誘発

問題と目的

攻撃行動は、挑発の源泉に対する報復としての直接的攻撃の形態で表出されることがある一方で、挑発の源泉ではない他の対象に対するやつ当たりの形態で表出されることもある。個人が挑発事象を経験した時に、挑発の源泉ではない他の対象に表出する攻撃は、置き換えられた攻撃 (displaced aggression) と定義される (Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939; Hovland & Sears, 1940)。例えば、子どもが教師に怒られた時に同級生にやつ当たりするといった攻撃行動が置き換えられた攻撃である。

置き換えられた攻撃研究は、欲求不満-攻撃仮説 (frustration-aggression hypothesis: Dollard et al., 1939; Hovland & Sears, 1940) が提唱された 1939 年以降、欲求不満-攻撃仮説の演繹的な現象の記述の形式で研究が

進められてきた。すなわち、欲求不満を経験した個人が、挑発の源泉ではない攻撃対象者に対する攻撃機会を与えられた際に、攻撃を行うか否かを検討してきた。しかし、挑発事象を経験した実験参加者が、挑発の源泉ではない攻撃対象者に攻撃を置き換えるとする研究がある一方 (e.g., Worchel, Hardy, & Hurley, 1976)、挑発事象を経験した実験参加者の攻撃評定が、挑発事象を経験しなかった実験参加者の攻撃評定よりも低くなる (i.e., 攻撃を置き換えない) という研究もあり (e.g., Berkowitz & Knurek, 1969)、研究結果の一貫性の欠如とともに、攻撃の置き換えという現象が疑問視されるようになった。また、矛盾する結果は、各研究の実験手続きの影響を受けるにもかかわらず、置き換えられた攻撃研究は、その調整変数についてはほとんど検討を加えてこなかった。このような経緯から、研究者の置き換えられた攻撃に対する関心は低下し、1980 年代後半以降ほとんど研究が行われなくなった。

しかし、2000 年代に入った現在、置き換えられた攻撃は注目を集め再び隆盛を取り戻しつつある。その引き金となったのが、2000 年に提出された 2 つの研究である。1 つは、Marcus-Newhall, Pedersen, Carlson, & Miller (2000) による置き換えられた攻撃研究のメタ分析である。Marcus-Newhall et al. (2000) は、置き換えられた攻撃について検討を行った 49 の論文にお

* 広島大学大学院教育学研究科, 日本学術振興会特別研究員
〒739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1
広島大学大学院教育学研究科教育 A 棟 7 階
発達心理学研究室
supernova2047@hiroshima-u.ac.jp

¹ 本研究は広島大学同窓会ドリームチャレンジ賞の助成を受けた。

本研究を一部として広島大学大学院教育学研究科 2007 年度修士論文を構成した。

ける82の実験研究についてメタ分析を行い、攻撃の置き換えが確かに生起することを明らかにした(平均効果量 $=+.54$, 95%信頼区間 $=.48, .61$)。さらに, Marcus-Newhall et al. (2000) は, 置き換えられた攻撃は, (a)実験参加者と攻撃対象者の相互作用場面がよりネガティブであるほど強くなること, (b)挑発者と攻撃対象者の類似性がより高いほど強くなること, および(c)挑発事象の強度がより強いほど弱くなることを明らかにし, 置き換えられた攻撃の調整変数には検討の余地があることを指摘した。

2つ目は, 置き換えられた攻撃は些細(trivial)な誘発事象をきっかけとするTDA(triggered displaced aggression)の形態で表出されることが多いとするMiller & Marcus-Newhall(1997)の指摘を受け, Pedersen, Gonzales, & Miller(2000)が, 置き換えられた攻撃におよぼす些細な誘発事象の影響を検討するTDAパラダイムを構築したことが挙げられる。TDAとは, 誘発されて表出する置き換えられた攻撃のことである(Dollard, 1938)。先述の例において, 教師に怒られた子どもが同級生に忘れ物について軽く指摘されたことをきっかけにやつ当たりした場合, これをTDAと呼ぶ。

Pedersen et al. (2000)によるTDAパラダイムの実験手続きは次の通りである。まず, T1(time 1)における挑発事象において, 実験者が1つ目の課題を実施した。実験者は, 挑発事象あり群の実験参加者に対しては, 課題における成績を非難する一方, 挑発事象なし群の実験参加者に対しては非難しなかった。次に, T2(time 2)における誘発事象では, 実験者に代わって後の攻撃対象者となる研究アシスタントが2つ目の課題を実施した。研究アシスタントは, 誘発事象あり群の実験参加者に対する課題の時には課題の説明を行う際に早口で説明し, 説明の途中で発音および課題番号を間違えることで誘発を行う一方, 誘発事象なし群の実験参加者に対する課題の時には発音および課題番号を間違えることはなかった。その後, 実験参加者には研究アシスタントを評価する機会が与えられた。その際, 研究アシスタントに対する実験参加者の評価は, 研究プログラムにおける研究アシスタントの雇用機会を左右すると告げられた。つまり, ネガティブな評価は, 相手に危害を加えることを意図した攻撃行動として測定された。2(挑発事象:あり,なし)×2(誘発事象:あり,なし)の2要因実験参加者間計画による実験の結果, 挑発事象あり・誘発事象あり群の攻撃評定は, 挑発事象あり・誘発事象なし群, 挑発事象なし・誘発事象あり

群および挑発事象なし・誘発事象なし群の攻撃評定と比較して有意に高かった。また, 媒介分析(mediational analyses)の結果, 挑発事象あり群の誘発事象によって喚起された不快感情は, 攻撃評定に及ぼす誘発事象の影響を媒介していた。これらの結果は, 個人が事前に何らかの挑発事象を経験していると, 誘発事象が些細なものであっても敵意的に解釈し, TDAを表出することを実証するものである。

さらに, Pedersen et al. (2000)の研究2では, 挑発事象あり・誘発事象なし群の攻撃評定が挑発事象なし・誘発事象なし群の攻撃評定よりも低くなる対比効果(contrast effect)が確認されている。対比効果とは, 挑発者と攻撃対象者を比較した場合に, 挑発者がより悪い人(nastier person), 攻撃対象者がより良い人(nicer person)として認知されるために, 攻撃対象者に対する攻撃評定が対比的に低くなる効果である(e.g., Berkowitz & Knurek, 1969; レビューとして, Marcus-Newhall et al., 2000)。つまり, 挑発事象を経験した後に誘発事象を経験しなかった場合は, 挑発者および攻撃対象者に対する印象の対比が顕著になり, 挑発事象と誘発事象の両方を経験しなかった場合よりも攻撃評定が低くなるということである。

TDAパラダイムが構築されたPedersen et al. (2000)以降, 置き換えられた攻撃研究ではTDA研究が主流となった。TDA研究は, その規定要因を検討することによって, 些細な誘発事象に対する不相応な報復についての説明を提供してきた。例えば, Vasquez, Denson, Pedersen, Stenstrom, & Miller (2005)は, 実験参加者のエッセイに対する評価点を操作することで誘発事象の強度の操作を行い, TDAに及ぼす誘発事象の強度の影響を検討した。その結果, 挑発事象を経験し, 些細な誘発事象(i.e., 7を最良とする7段階評定における平均評価点:3.5)を経験した実験参加者のみがTDAを表出し, 強度が強い誘発事象(i.e., 評価平均点:2.0)およびニュートラルな誘発事象(i.e., 評価平均点:5.3)を経験した実験参加者はTDAを表出しないことが明らかになった。この結果は, 些細な誘発事象に対する一見不相応な報復が, 事前に挑発事象を経験しているために表出されたTDAであることを示している。また, Bushman, Bonacci, Pedersen, Vasquez, & Miller (2005)は, 挑発事象と誘発事象の間の認知活動について操作を行い, TDAに及ぼす反すうの影響を検討した。その結果, 挑発事象と誘発事象の間の認知活動として反すうを行った実験参加者は, 気晴らしを行った実験参加者およびポジティブなムードについての思考

を行った実験参加者よりも有意に強い TDA を表出すること、また、挑発事象で喚起された怒り感情について反すうを行うと、挑発事象と誘発事象の間に 8 時間の間隔がある場合でも、TDA を表出することが明らかになった。このように、TDA 研究は、TDA パラダイムを用いて置き換えられた攻撃が誘発されるメカニズムに関する基礎的知見を蓄積させてきた。

しかし、TDA は社会的相互作用において表出されるにもかかわらず、TDA に及ぼす社会的要因の影響については検討されていない。とりわけ、対人関係における地位関係などは検討されていない。TDA に及ぼす攻撃対象者の地位の影響に関する知見として、唯一、Miller, Pedersen, Earleywine, & Pollock (2003) の TDA 理論 (theoretical model of triggered displaced aggression) における理論的検討が挙げられる。TDA 理論では、欲求不満—攻撃仮説 (Dollard et al., 1939; Hovland & Sears, 1940) と同様に、地位が低い攻撃対象者に TDA を表出しやすいことが指摘されている。これは、地位が高い攻撃対象者に対して TDA を表出すると、その TDA に対してさらなる報復を受ける可能性があるため、地位が低い攻撃対象者に対して TDA を表出しやすいとしている。しかし、この知見は理論的検討であり、実証されていない。

また、Marcus-Newhall et al. (2000) の置き換えられた攻撃に関するメタ分析では、置き換えられた攻撃は、挑発者と攻撃対象者の類似性がより高いほど強くなることが示されている。これは、個人が挑発事象を経験した時に、挑発者に対する報復が第 1 の目標となるが、実験場面においては攻撃対象者は挑発の源泉ではない個人であるため、挑発者と類似性が高い攻撃対象者により強い置き換えられた攻撃が表出されるのである。例えば、置き換えられた攻撃に及ぼすラベリングの影響を検討した Berkowitz & Knurek (1969) では、個人は、挑発者と異なる名前を持つ攻撃対象者よりも、挑発者と同じ名前を持つ攻撃対象者に対してより攻撃を置き換えることを明らかにしている。つまり、ラベルとしての名前が同一である (i.e., 類似性が高い) ために、攻撃対象者は置き換えられた攻撃を受けるのである。置き換えられた攻撃の調整変数である挑発者と攻撃対象者の類似性を地位関係に当てはめた場合、挑発者の地位と攻撃対象者の地位が同一の時に TDA が強くなると考えられる。しかし、Marcus-Newhall et al. (2000) の知見は置き換えられた攻撃に関するものであり、TDA については検討されていない。また、類似性を地位関係に当てはめることの適否については、実

証的に検討を行う必要がある。

以上を要するに、TDA に関して次の 2 点が導かれる。(a) 欲求不満—攻撃仮説 (Dollard et al., 1939; Hovland & Sears, 1940) および TDA 理論 (Miller et al., 2003) の知見から、攻撃対象者の地位が低い場合に TDA が強くなる。(b) Marcus-Newhall et al. (2000) の置き換えられた攻撃に関するメタ分析の知見から、挑発者と攻撃対象者の地位が同じ場合に TDA が強くなる。本研究では、TDA に及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響を検討する。この検討を通じて、挑発者の地位および攻撃対象者の地位の交互作用がどのように TDA に影響を与え、社会的相互作用においてどのような地位の個人が TDA の攻撃対象者になりやすいのかが明らかとなる。

先述のように、TDA 研究では、TDA に及ぼす地位関係などの社会的要因の影響が検討されていない。その理由として、TDA パラダイムの実験手続きの特性が考えられる。TDA パラダイムでは、虚偽の実験として問題解決能力や印象形成に関する実験を行うため、実験者が挑発者となり、2 人目の実験参加者を装っているさくらが攻撃対象者となることが多い (Aviles, Earleywine, Pollock, Stratton, & Miller, 2005; Bushman et al., 2005; Denson, Aviles, Pollock, Earleywine, Vasquez, & Miller, 2008; Denson, Pedersen, & Miller, 2006; Pedersen, 2006; Pedersen et al., 2000; Vasquez et al., 2005; Vasquez, Ensari, Pedersen, Tan, & Miller, 2007)。挑発者は、Bushman et al. (2005) においてさくらとして参加している学生 (研究 3) であることを除くと、先行研究における挑発者はすべて実験者である。また、攻撃対象者は、Aviles et al. (2005), Bushman et al. (2005) の研究 1 および Pedersen et al. (2000) の研究 1 において研究アシスタント、Pedersen et al. (2000) の研究 2 において学年が 1 つ上の学生であることを除くと、先行研究における攻撃対象者はすべて 2 人目の実験参加者を装っているさくらである。本研究では、地位関係の操作容易性から、TDA に及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響を仮想場面法によって検討する。仮想場面法は、倫理問題 (ethical concerns) への配慮という観点からも有用である。

研究 1

目的

研究 1 では、TDA パラダイムの実験手続きを仮想場面法に応用し、その妥当性を検討する。仮想場面法において置き換えられた攻撃に及ぼす些細な誘発事象

の影響を検討し、TDAパラダイムによる実験研究 (Bushman et al., 2005 ; Pedersen et al., 2000 ; Vasquez et al., 2005)と同様の結果が得られるか否かを検討する。すなわち、仮想場面法の妥当性は以下の3点によって確認される。(a)挑発事象あり・誘発事象あり群は、挑発事象あり・誘発事象なし群、挑発事象なし・誘発事象あり群および挑発事象なし・誘発事象なし群と比較して有意に強い攻撃評定を行う (i.e., 挑発事象あり・誘発事象あり群はTDAを表出する)。(b)挑発事象あり・誘発事象なし群は、挑発事象なし・誘発事象なし群と比較して有意に弱い攻撃評定を行う (i.e., 対比効果を示す)。(c)挑発事象で喚起された怒り感情、誘発事象で喚起された怒り感情および攻撃評定は、挑発事象あり・誘発事象あり群においてはそれぞれ有意な相関を示し、挑発事象あり・誘発事象なし群においては有意な相関を示さない (挑発事象あり・誘発事象あり群における挑発事象で喚起された怒り感情、誘発事象で喚起された怒り感情および攻撃評定はそれぞれ関連する)。

方法

研究参加者 調査は広島県内の大学で行った。研究参加者は、大学生128名 (男性68名,女性60名),平均年齢20.25歳 ($SD=0.58$)であった。

要因計画 要因計画は、2 (挑発事象:あり,なし)×2 (誘発事象:あり,なし)の2要因研究参加者間計画であった。各群に32名を割り当てた。

手続き 質問紙による集団調査を行った。各研究参加者は、ランダムに配布される4種類の質問紙の中から1つを受け取り、回答を行った。

質問紙の構成 TDAパラダイムによる実験手続きを参考に、挑発事象、挑発事象後の感情評定、誘発事象、誘発事象後の感情評定および攻撃評定の5つを含む物語文を作成した。物語の想像容易性に配慮し、大学教授の仕事を手伝う物語を設定した。挑発事象がある物語文とない物語文、誘発事象がある物語文とない物語文を組み合わせた4種類の質問紙を作成した。

(a)挑発者および攻撃対象者の地位 TDAパラダイムによる実験研究で設定されている挑発者および攻撃対象者の地位は、地位が高い挑発者 (i.e., 実験者)と地位が同等の攻撃対象者 (i.e., 2人目の実験参加者を装っているさくら)となっている。そのため、研究1では、挑発者を研究参加者が所属するコース (学科・専攻)の先輩、攻撃対象者を研究参加者が所属するコース (学科・専攻)の同輩に設定した。

(b)物語文 研究参加者が所属するコース (学科・専攻)の教授から仕事の手伝いを依頼され、先輩および同輩

と2人1組のペアで行う仕事をする物語文を作成した。研究1で用いた物語文をTable 1に示す。挑発事象は、研究参加者が先輩から作業が遅いことを指摘され、作業能力に関して非難される場面 (場面①)を設定した。誘発事象は、研究参加者が同輩から作業のペースを上げようことを提案される場面 (場面②)を設定した。誘発事象は、挑発事象より強度が弱く、些細な誘発事象になるよう設定した。攻撃場面は、教授から同輩の仕事量を定めるよう指示される場面 (場面③)と、教授から同輩のアルバイト代の参考として同輩についての印象を尋ねられる場面 (場面④)を設定した。

(c)挑発事象後の感情評定 挑発事象によって喚起された感情を測定するため、挑発事象 (場面①)の後に、怒り感情、否定的感情および肯定的感情に関する項目に評定させた。先行研究 (Bushman et al., 2005 ; Pedersen et al., 2000 ; Vasquez et al., 2005)を参考に、怒り感情10項目 (怒った,反抗的な,敵意を持った,ムカついた,イライラした,軽蔑した,困った,嫌いな,不機嫌な,不満な)を作成した。否定的感情8項目 (動揺した,びくびくした,うろたえた,恐ろしい,そわそわした,緊張した,驚いた,どきどきした)および肯定的感情8項目 (活気のある,楽しい,充実した,陽気な,愉快的,元気な,快調な,やる気に満ちた)については小川・門地・菊谷・鈴木 (2000)の一般感情尺度を用いた。合計26項目について7段階評定法 (全くあてはまらない:1-とてもよくあてはまる:7)で評定させた。

(d)誘発事象後の感情評定 誘発事象によって喚起された感情を測定するため、誘発事象 (場面②)の後に、怒り感情および肯定的感情に関する項目に評定させた。先行研究 (Bushman et al., 2005 ; Pedersen et al., 2000 ; Vasquez et al., 2005)を参考に、怒り感情3項目 (怒った,イライラした,困った)および肯定的感情2項目 (楽しい,嬉しい)を作成した。合計5項目について7段階評定法 (全くあてはまらない:1-とてもよくあてはまる:7)で評定させた。

(e)攻撃評定 攻撃評定として、同輩の仕事量1項目 (行動指標:仕事量をどのくらいにするか)と、アルバイト代の参考となる同輩についての印象評定3項目 (評価指標:次に仕事をする時も一緒に仕事がしたいか,人物的に好ましいか,友好的か)を用いた。攻撃行動は、“他者に危害を加えることを意図した行動”として定義される (cf. Dodge, Coie, & Lynam, 2006)。Aviles et al. (2005), Bushman et al. (2005)の研究1およびPedersen et al. (2000)の研究1と研究2においても、雇用機会を左右する印象評定が攻撃評定として用いられている。仕事量は、同輩に多くの仕事を課することができる点において攻撃評定と

Table 1 研究1で用いた物語文

説明文

あなたは、所属するコース（学科・専攻）の教授から、教授の仕事の手伝いを依頼されました。仕事の手伝いをする学生には、あなたの他に、あなたが所属するコース（学科・専攻）の、学年が1つ上の先輩と、学年が同じである同級生の2人がいました。先輩は、教授の仕事の手伝いを何度も経験していましたが、あなたと同級生は、初めてでした。仕事は2種類ありました。2つとも、2人1組のペアで行う仕事でした。1つめの仕事は、手伝いの経験がある先輩とペアを組んで行う仕事でした。2つめの仕事は、手伝いの経験がない同級生とペアを組んで行う仕事でした。

場面①：挑発事象（カッコ内は挑発事象なし）

あなたは、1つめの仕事に取り掛かりました。1つめの仕事は、先輩と2人でペアを組み、一緒に仕事を行いました。1つめの仕事では、教授から、仕事の手伝いの経験者である先輩の指示に従うように言われました。仕事は難しい仕事で、仕事量も多くて大変でした。仕事の途中、先輩は、あなたに向かって、「以前に他の学生が何人か同じ仕事をしたけど、仕事の速さと技術は、みんな君より速くて、しかも上手にやっていたよ。君は仕事をするのが遅くて、しかも下手だ。もっと速く、もっと上手にやってくれ。君は仕事の能力が低い。それでも大学生か？仕事の手伝いとして使えないよ。この調子だと、1人でやる方がましだな。」（「以前に他の学生が何人か同じ仕事をしたけど、仕事の速さと技術は、みんな君と同じくらいだった。この調子で仕事を進めていこう。」）と言いました。

挑発事象後の感情評定 26 項目

この時、あなたはどのような感情を抱きますか？以下の各感情があなたの感情にあてはまる程度について、1から7の数字のうち、1つに○をつけてください。

場面②：誘発事象（カッコ内は誘発事象なし）

1つめの仕事が終わった後、あなたは、2つめの仕事に移りました。2つめの仕事は、教授の仕事の手伝いがはじめての同級生と、2人でペアを組み、一緒に仕事を行いました。2つめの仕事では、教授から、2人とも仕事の手伝いの経験がないため、仕事の速さは互いに相談して決めるように言われました。仕事の途中、同級生は、あなたに向かって、「もう少しペースを速くしない？」（「仕事はとても難しいから、今のペースがちょうどいいと思う。」）と言いました。

誘発事象後の感情評定 5 項目

この時、あなたはどのような感情を抱きますか？以下の各感情があなたの感情にあてはまる程度について、1から7の数字のうち、1つに○をつけてください。

場面③：仕事量の指定

2つの仕事が終わった後、教授は、あなたに向かって、「2つめの仕事でペアになった同級生には、この後も1人で仕事を手伝ってもらうことになっている。同級生と一緒に仕事をした君に、同級生の仕事の仕事量を決めてもらいたい。」と言いました。

攻撃評定 1 項目（行動指標）

この時、あなたは、同級生の仕事の仕事量を自由に設定することができます。以下の仕事量が、あなたの設定する仕事量にあてはまる程度について、1から11の数字のうち、1つに○をつけてください。

場面④：印象評定

同級生の仕事量を決めた後、あなたは、教授から仕事を手伝ったお礼としてアルバイト代をもらいました。教授は、「同級生の仕事について、評価して欲しい。君の評価を参考にして、同級生のアルバイト代を決めようと思う。」と言いました。

攻撃評定 3 項目（評価指標）

この時、あなたは、同級生の仕事について、自由に評価することができます。以下の評価が、あなたの同級生に対する評価にあてはまる程度について、1から11の数字のうち、1つに○をつけてください。

注：文章表現の明瞭性を考慮して、同輩を同級生と表記した

して用いられる。また、同輩に対する印象評定は、同輩のアルバイト代を左右できる点において攻撃評定として用いられる。仕事量 1 項目は場面③、印象評定 3 項目は場面④において、それぞれ 11 段階評定法で評定させた (e.g., 仕事量: 非常に少なくする: 1—少なくする: 4—多くする: 8—非常に多くする: 11)。

結果と考察

操作チェック (a) 挑発操作 挑発事象後の感情評定 26 項目について、3 因子解最尤法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、怒り感情として用いた“困った”が、怒り感情と否定的感情の 2 因子に負荷を示した。そのため、“困った”を分析から除外し、

怒り感情 9 項目、否定的感情 8 項目および肯定的感情 8 項目を分析に用いた。挑発事象を経験した場合に怒り感情および否定的感情が喚起され、肯定的感情は喚起されないことを示すため、各感情評定の合計得点について、*t* 検定を用いて挑発事象あり群 ($n=64$) と挑発事象なし群 ($n=64$) の差の検定を行った。その結果、怒り感情 9 項目では、挑発事象あり群 ($\alpha=.94$, $M=46.16$, $SD=13.03$) が、挑発事象なし群 ($\alpha=.94$, $M=17.16$, $SD=10.71$) よりも有意に高かった ($t(126)=13.75$, $p<.001$)。否定的感情 8 項目では、挑発事象あり群 ($\alpha=.92$, $M=32.20$, $SD=12.25$) が、挑発事象なし群 ($\alpha=.90$, $M=14.61$, $SD=8.16$) よりも有意に高かった ($t(126)=10.65$,

$p < .001$)。肯定的感情 8 項目では、挑発事象なし群 ($\alpha = .92, M = 21.95, SD = 11.33$) が、挑発事象あり群 ($\alpha = .94, M = 10.59, SD = 5.76$) よりも有意に高かった ($t(126) = 7.15, p < .001$)。これらの結果から、挑発操作は有効であったことが示された。

(b) 誘発操作 誘発事象後の感情評定 5 項目について、2 因子解最尤法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、怒り感情として用いた“困った”の怒り感情への負荷が低かった。そのため、“困った”を分析から除外し、怒り感情 2 項目 ($\alpha = .94$) および肯定的感情 2 項目 ($\alpha = .90$) を分析に用いた。挑発事象を経験した場合にのみ誘発事象によって怒り感情が喚起され、肯定的感情は喚起されないことを示すため、各感情評定の合計得点について、2 (挑発事象: あり, なし) \times 2 (誘発事象: あり, なし) の 2 要因分散分析を行った。怒り感情 2 項目では、誘発事象の主効果が有意であり ($F(1, 124) = 14.98, p < .001$)、誘発事象あり群 ($n = 64, M = 4.97, SD = 3.40$) が、誘発事象なし群 ($n = 64, M = 3.20, SD = 1.94$) より有意に高かった。また、交互作用が有意であり ($F(1, 124) = 15.51, p < .001$)、単純主効果検定の結果、挑発事象あり・誘発事象あり群 ($M = 6.38, SD = 3.83$) が、挑発事象なし・誘発事象あり群 ($M = 3.56, SD = 2.17$) より有意に高く ($F(1, 124) = 19.00, p < .001$)、挑発事象なし・誘発事象あり群と挑発事象なし・誘発事象なし群 ($M = 3.59, SD = 2.26$) には差が無かった ($F(1, 124) = 0.002, ns$)。肯定的感情 2 項目では、誘発事象の主効果が有意であり ($F(1, 124) = 32.45, p < .001$)、誘発事象なし群 ($M = 6.80, SD = 3.16$) が、誘発事象あり群 ($M = 3.97, SD = 2.77$) より有意に高かった。また、挑発事象あり・誘発事象あり群 ($M = 3.84, SD = 2.54$) と挑発事象なし・誘発事象あり群 ($M = 4.09, SD = 3.02, F(1, 124) = 0.13, ns$) および挑発事象なし・誘発事象あり群と挑発事象なし・誘発事象なし群 ($M = 5.34, SD = 2.67, F(1, 124) = 3.17, ns$) には差が無かった。これらの結果から、誘発操作は有効であったことが示された。

攻撃評定 攻撃評定 4 項目 ($\alpha = .82$) について 2 (挑発事象: あり, なし) \times 2 (誘発事象: あり, なし) の 2 要因分散分析を行った。その結果、誘発事象の主効果 ($F(1, 124) = 41.58, p < .001$) および交互作用 ($F(1, 124) = 39.02, p < .001$) が有意であった。挑発事象の主効果は有意ではなかった ($F(1, 124) = 0.37, ns$)。置き換えられた攻撃に及ぼす些細な誘発事象の影響を Figure 1 に示す。交互作用について単純主効果検定を行った結果、誘発事象あり群における挑発事象の単純主効果 ($F(1, 124) = 23.47, p < .001$) および誘発事象なし群における挑発事象の単

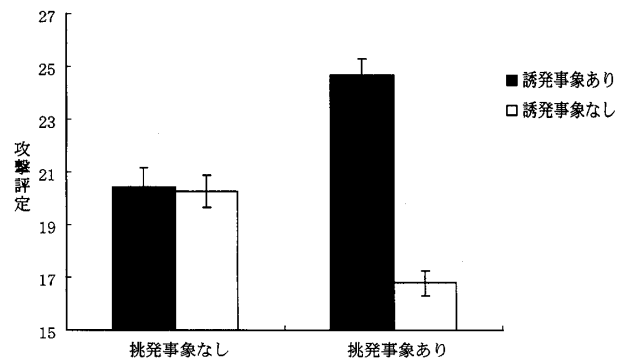


Figure 1 置き換えられた攻撃に及ぼす些細な誘発事象の影響 (エラーバーは標準誤差を示す)

純主効果 ($F(1, 124) = 15.92, p < .001$) が有意であった。挑発事象あり・誘発事象あり群 ($M = 24.66, SD = 3.55$) は、挑発事象あり・誘発事象なし群 ($M = 16.78, SD = 2.69$)、挑発事象なし・誘発事象あり群 ($M = 20.41, SD = 4.20$) および挑発事象なし・誘発事象なし群 ($M = 20.28, SD = 3.43$) と比較して有意に強い攻撃評定を行い、(a) 挑発事象あり・誘発事象あり群は TDA を表出することが示された。また、挑発事象あり・誘発事象なし群は、挑発事象なし・誘発事象なし群と比較して有意に弱い攻撃評定を行い、(b) 対比効果が示された。

挑発事象で喚起された怒り感情、誘発事象で喚起された怒り感情および攻撃評定の関連 挑発事象を経験する 2 群において、誘発事象を経験する場合は挑発事象で喚起された怒り感情 (挑発怒り)、誘発事象で喚起された怒り感情 (誘発怒り) および攻撃評定がそれぞれ関連するのに対し、誘発事象を経験しない場合は挑発怒り、誘発怒りおよび攻撃評定がそれぞれ関連しないことを示すため、挑発事象あり・誘発事象あり群および挑発事象あり・誘発事象なし群において、挑発怒り、誘発怒りおよび攻撃評定の相関係数を算出した。その結果、挑発事象あり・誘発事象あり群では、挑発怒りと誘発怒りは $r = .64 (p < .001)$ 、誘発怒りと攻撃評定は $r = .40 (p < .05)$ 、挑発怒りと攻撃評定は $r = .49 (p < .01)$ であり、それぞれ有意な相関を示した。一方、挑発事象あり・誘発事象なし群では、挑発怒りと誘発怒りは $r = .05$ 、誘発怒りと攻撃評定は $r = .18$ 、挑発怒りと攻撃評定は $r = .20$ であり、それぞれ有意な相関を示さなかった (いずれも ns)。これらの結果から、(c) 挑発事象あり・誘発事象あり群における挑発事象で喚起された怒り感情、誘発事象で喚起された怒り感情および攻撃評定はそれぞれ関連することが示された。

TDA パラダイムによる実験研究 (Bushman et al., 2005 ; Pedersen et al., 2000 ; Vasquez et al., 2005) の追試の

形式で行った(a), (b)および(c)に関する検討より, 仮想場面法の妥当性が示された。

研究 2

目的

研究2では, 仮想場面法において挑発者および攻撃対象者の地位として先輩, 同輩, 後輩を設定し, TDAに及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響を検討する。欲求不満-攻撃仮説(Dollard et al., 1939; Hovland & Sears, 1940)およびTDA理論(Miller et al., 2003)の知見から, 攻撃対象者の地位が低い場合にTDAが強くなること, また, Marcus-Newhall et al. (2000)の置き換えられた攻撃に関するメタ分析の知見から, 挑発者と攻撃対象者の地位が同じ場合にTDAが強くなることが予想される。

方法

研究参加者 調査は広島県内の大学で行った。研究参加者は, 大学生243名(女性168名, 男性75名), 平均年齢20.58歳($SD=1.54$)であった。

要因計画 要因計画は, 3(挑発者の地位: 先輩, 同輩, 後輩)×3(攻撃対象者の地位: 先輩, 同輩, 後輩)の2要因研究参加者間計画であった。各群に27名を割り当てた。すべての群が挑発事象あり・誘発事象あり群であった。

手続き 質問紙による集団調査を行った。各研究参加者は, ランダムに配布される9種類の質問紙の中から1つを受け取り, 回答を行った。

質問紙の構成 研究1で用いた物語文において, 挑発者の地位として先輩, 同輩, 後輩および攻撃対象者の地位として先輩, 同輩, 後輩のいずれかを割り当てた。この点以外は, 質問紙の構成は研究1と同じであった。なお, 口語表現を挑発者および攻撃対象者の地位に適合するよう改めた。例えば, 挑発者が後輩の場合, “以前に他の学生が何人か同じ仕事をしましたが, 仕事の速さと技術は, あなたより速くて, しかも上手にやっていました。あなたは仕事をするのが遅くて, しかも下手です。もっと速く, もっと上手にやってください。あなたは仕事の能力が低いです。それでも大学生ですか? 仕事の手伝いとして使えません。この調子だと, 1人でやる方がましです。”とした。

結果と考察

攻撃評定 攻撃評定4項目($\alpha=.81$)について, 3(挑発者の地位: 先輩, 同輩, 後輩)×3(攻撃対象者の地位: 先輩, 同輩, 後輩)の2要因分散分析を行った。その結果, 攻撃対象者の地位の主効果($F(2,234)=3.60, p<.05$)および交互作用($F(4,234)=2.81, p<.05$)が有意であった。挑発者

の地位の主効果は有意ではなかった($F(2,234)=2.13, ns$)。TDAに及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響をFigure 2に示す。攻撃対象者の地位の主効果について多重比較(Bonferroni Collection)を行った結果, 後輩の攻撃対象者に対する攻撃評定が, 先輩の攻撃対象者に対する攻撃評定より有意に高かった($F(2,234)=3.55, p<.05$)。交互作用について単純主効果検定を行った結果, 同輩の挑発者における攻撃対象者の地位の単純主効果が有意であり($F(2,234)=4.51, p<.01$), 同輩の攻撃対象者($M=25.26, SD=5.50$)および後輩の攻撃対象者($M=25.26, SD=4.70$)に対する攻撃評定が, 先輩の攻撃対象者($M=21.81, SD=3.99$)に対する攻撃評定より有意に高かった。また, 後輩の挑発者における攻撃対象者の地位の単純主効果が有意であり($F(2,234)=4.51, p<.01$), 後輩の攻撃対象者($M=25.22, SD=5.03$)に対する攻撃評定が, 先輩の攻撃対象者($M=21.74, SD=4.49$)および同輩の攻撃対象者($M=21.81, SD=4.55$)に対する攻撃評定より有意に高かった。さらに, 先輩の攻撃対象者における挑発者の地位の単純主効果が有意であり($F(2,234)=3.68, p<.05$), 先輩の挑発者における攻撃評定($M=24.89, SD=5.56$)が, 同輩の挑発者および後輩の挑発者における攻撃評定より有意に高かった。先輩の挑発者における攻撃対象者の地位の単純主効果は有意ではなかった($F(2,234)=0.49, ns$, 挑発者先輩・攻撃対象者同輩: $M=24.26, SD=4.79$, 挑発者先輩・攻撃対象者後輩: $M=24.11, SD=4.99$)。

攻撃対象者の地位の主効果は, 攻撃対象者が先輩の場合と比較して, 後輩の場合にTDAが強くなることを示していた。この結果は, 欲求不満-攻撃仮説(Dollard et al., 1939; Hovland & Sears, 1940)およびTDA理論(Miller et al., 2003)の知見を支持するものであり, 攻撃対象者の地位が個人よりも低い場合にTDAを表出しやすいことを示唆している。

挑発者の地位および攻撃対象者の地位の交互作用は,

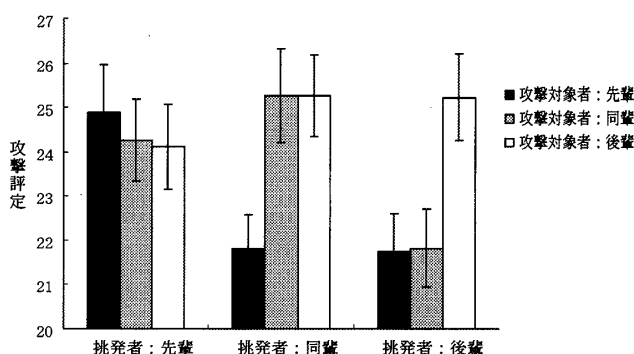


Figure 2 TDAに及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響(エラーバーは標準誤差を示す)

攻撃対象者の地位が挑発者の地位よりも高い場合と比較して、挑発者の地位と同等もしくは低い場合に TDA が強くなることを示していた。本研究は、Marcus-Newhall et al. (2000) で示された、置き換えられた攻撃の調整変数である挑発者と攻撃対象者の類似性を地位関係に当てはめて検討を行った。この結果は、欲求不満-攻撃仮説 (Dollard et al., 1939 ; Hovland & Sears, 1940) と TDA 理論 (Miller et al., 2003) の知見および Marcus-Newhall et al. (2000) のメタ分析の知見を支持すると同時に、類似性を地位関係に当てはめることの適性を示すものであり、挑発者の地位と同等の地位もしくは挑発者の地位よりも低い地位の攻撃対象者に対して TDA を表出しやすいことを示唆している。

総合考察

本研究は、TDA に及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響を検討することで、挑発者の地位および攻撃対象者の地位の交互作用がどのように TDA に影響を与え、社会的相互作用においてどのような地位の個人が TDA の攻撃対象者になりやすいのかを検討した。研究 1 では、地位関係の操作容易性および倫理問題への配慮から、TDA パラダイムによる実験手続きを仮想場面法に適用し、その妥当性を検討した。その結果、(a) 挑発事象あり・誘発事象あり群は、挑発事象あり・誘発事象なし群、挑発事象なし・誘発事象あり群および挑発事象なし・誘発事象なし群と比較して有意に強い攻撃評定を行い、挑発事象あり・誘発事象あり群は TDA を表出すること、(b) 挑発事象あり・誘発事象なし群は、挑発事象なし・誘発事象なし群と比較して有意に弱い攻撃評定を行う対比効果を示すこと、および(c) 挑発事象あり・誘発事象あり群における挑発事象で喚起された怒り感情、誘発事象で喚起された怒り感情および攻撃評定はそれぞれ関連することが示され、仮想場面法の妥当性が示された。研究 2 では、仮想場面法において、挑発者および攻撃対象者の地位として先輩、同輩、後輩を設定し、TDA に及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響を検討した。その結果、攻撃対象者が先輩の場合と比較して、後輩の場合に TDA が強くなることが示され、攻撃対象者の地位が個人より低い場合に TDA を表出しやすいことが示唆された。また、攻撃対象者の地位が挑発者の地位よりも高い場合と比較して、攻撃対象者の地位が挑発者の地位と同等もしくは低い場合に TDA が強くなることを示され、挑発者の地位と同等の地位もしくは挑発者の地位よりも低い地位の攻撃対象者に対して TDA を

表出しやすいことが示唆された。ここでは、本研究の意義と示唆、本研究の限界および今後の課題について考察する。

本研究の意義と示唆

本研究の意義として、3点が挙げられる。1つ目は、仮想場面法における TDA パラダイムの有効性が示されたことである。日本における心理学研究では、倫理問題への配慮から、実験場面において実験参加者に挑発等の操作を行うことが禁止されている。そのため、日本における怒り研究や攻撃研究の分野では、想起法 (e.g., 日比野・湯川, 2004) や TV ゲーム (e.g., 田村・大淵, 2006) を用いて検討が行われてきた。本研究では、仮想場面法による挑発操作および誘発操作の有効性が示され、今後の研究においても仮想場面法が応用可能であることが示された。

2つ目は、攻撃対象者の地位が個人より低い場合に TDA を表出しやすいことが示唆されたことである。対人関係において地位の低い、所謂“下”の者に対してやつ当たりをはじめとする TDA を表出しやすいことは、TDA が攻撃の捌け口としてのスケープゴティングや弱い者いじめに発展する可能性を示唆する。また、攻撃対象者の立場からは、自分よりも地位の高い者に対する言動は、たとえ些細なものであっても誘発事象となりやすく、それをきっかけとして TDA を表出されやすいと言える。

3つ目は、TDA は挑発者の地位および攻撃対象者の地位の交互作用に影響されることが示されたことである。これは、対比効果によって攻撃評定が低くなることから考察可能である。すなわち、挑発者の地位と攻撃対象者の地位を比較した場合、攻撃対象者の地位が挑発者の地位と同等もしくはそれよりも低くなると TDA を表出しやすいことを示唆している。

本研究の限界

本研究では、仮想場面法を用いて検討を行ったため、それに伴う限界を指摘しておく。1つ目に、仮想場面法における挑発操作および誘発操作の有効性が示されたが、連合ネットワーク内で相互に関連付けられた攻撃に関連した感情、思考および覚醒の活性化 (Berkowitz, 1989, 1990, 1993) が、日常生活や実験研究で経験する活性化と仮想場面法で経験する活性化とは質的に異なる可能性が考えられる。これは、想起法や TV ゲームを用いた研究においても同様のことが指摘できるが、仮想場面法の限界として捉える必要がある。

2つ目に、本研究では、Miller et al. (2003) の TDA 理論が仮定する怒りの反すうや報復の抑制といった、

TDA に及ぼす認知過程の影響は検討していない。TDA 理論では、怒りの反すうと報復の抑制の視座から、対立する2つの仮説が提唱されている。第1の仮説では、個人が挑発事象を経験した際、地位が高い挑発者の挑発に対しては、報復の抑制が強く、怒りの反すうが強くなるため、TDA が強くなるのに対して、地位が低い挑発者の挑発に対しては、報復の抑制が弱く、怒りの反すうが弱いため、TDA が弱くなるとしている。第2の仮説では、地位が高い挑発者の挑発に対しては、報復の抑制に対する正当化が生じ、怒りの反すうが弱いため、TDA が弱くなるのに対して、地位が低い挑発者の挑発に対しては、報復の抑制に対する正当化が生じず、怒りの反すうが強いため、TDA が強くなるとしている。現在のところ、どちらの仮説が妥当であるかは実証されていない。本研究でも、挑発者の地位の主効果は確認されていないため、示唆を提供するには至らなかった。

今後の課題

最後に、今後の課題について考察する。TDA パラダイムでは、T1の挑発事象において挑発操作を行い、続くT2の誘発事象において誘発操作を行い、最後に攻撃対象者に対する攻撃機会を与える。この手続きでは、攻撃対象者に対する攻撃機会は与えられているが、挑発者に対する攻撃機会が与えられていない。すなわち、挑発の源泉ではない他の対象に対する置き換えられた攻撃は測定可能であるが、挑発の源泉である挑発者に対する報復としての直接的攻撃は測定不可能である。日常場面では、報復としての直接的攻撃、置き換えられた攻撃およびTDAが混在するかたちで表出される。また、挑発事象は人に限らず、気温や騒音などによっても引き起こされる。今後は、挑発者をはじめとする挑発の源泉に対する報復としての直接的攻撃の表出および抑制、もしくは、その両者の交互作用がTDAに及ぼす影響を検討する必要がある。

地位が高い個人への攻撃は抑制されることが多く、地位関係は攻撃行動の主要な規定要因として扱われているが (cf. Anderson & Bushman, 2002), 本研究では、挑発者の地位が個人よりも高い場合には、攻撃対象者の地位が個人よりも高い場合であってもTDAを表出することが示された。この結果には、攻撃時の非対面性が影響した可能性が考えられる。TDAパラダイムにおける攻撃評定は、Bushman et al. (2005) の研究2の競争的反応時間課題における攻撃評定以外は攻撃対象者と非対面で行われ、攻撃評定後も攻撃対象者と相互作用を行うことはない。本研究においても、攻撃評定で

ある仕事量の指定 (場面③) および印象評定 (場面④) は攻撃対象者と非対面で行い、攻撃評定後に攻撃対象者との相互作用を行わない物語文を用いて検討を行った。そのため、攻撃時の非対面性が、地位が高い個人への攻撃を促進する方向に作用した可能性が考えられる。TDAに及ぼす攻撃時の対面性・非対面性の影響について検討を行うことで、攻撃対象者の地位や勢力といった社会的要因がTDAを規定する程度が明らかになるだろう。

謝 辞

論文作成にあたりご指導・ご助言いただきました広島大学大学院教育学研究科の前田健一教授に感謝いたします。

引用文献

- Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002). Human aggression. *Annual Review of Psychology*, *53*, 27-51.
- Aviles, F. E., Earleywine, M., Pollock, V. E., Stratton, J., & Miller, N. (2005). Alcohol's effect on triggered displaced aggression. *Psychology of Addictive Behaviors*, *19*, 108-111.
- Berkowitz, L. (1989). Frustration-aggression hypothesis: Examination and reformation. *Psychological Bulletin*, *106*, 59-73.
- Berkowitz, L. (1990). On the formation and regulation of anger and aggression: A cognitive-neoassociationistic analysis. *American Psychologist*, *45*, 494-503.
- Berkowitz, L. (1993). *Aggression: Its causes, consequences, and control*. New York: McGraw-Hill.
- Berkowitz, L., & Knurek, D. A. (1969). Label-mediated hostility generalization to disliked objects. *Journal of Personality and Social Psychology*, *28*, 427-442.
- Bushman, B. J., Bonacci, A. M., Pedersen, W. C., Vasquez, E. A., & Miller, N. (2005). Chewing on it can chew you up: Effects of rumination on triggered displaced aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, *88*, 969-983.
- Denson, T. F., Aviles, F. E., Pollock, V. E., Earleywine, M., Vasquez, E. A., & Miller, N. (2008). The effect of alcohol and the salience of aggres-

- sive cues on triggered displaced aggression. *Aggressive Behavior*, **34**, 25-33.
- Denson, T. F., Pedersen, W. C., & Miller, N. (2006). The Displaced Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 1032-1051.
- Dodge, K. A., Coie, J. D., & Lynam, D. (2006). Aggression and antisocial behavior in youth. In W. Damon & R. M. Lerner (Series Eds.), N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology : Vol. 3, Social, emotional, and personality development* (pp. 719-788). New York : Wiley.
- Dollard, J. (1938). Hostility and fear in social life. *Social Forces*, **17**, 15-26.
- Dollard, J., Doob, L. W., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*. New Haven, CT : Yale University Press.
- 日比野桂・湯川進太郎 (2004). 怒り経験の鎮静化過程—感情・認知・行動の時系列的変化— 心理学研究, **74**, 521-530. (Hibino, K., & Yukawa, S. (2004). The calming process of anger experience : Time series changes of affects, cognitions, and behaviors. *Japanese Journal of Psychology*, **74**, 521-530.)
- Hovland, C., & Sears, R. (1940). Minor studies of aggression : VI. Correlation of lynchings with economic indices. *Journal of Psychology*, **9**, 301-310.
- Marcus-Newhall, A., Pedersen, W. C., Carlson, M., & Miller, N. (2000). Displaced aggression is alive and well : A meta-analytic review. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 670-689.
- Miller, N., & Marcus-Newhall, A. (1997). A conceptual analysis of displaced aggression. In R. Ben-Ari & Y. Rich (Eds.), *Enhancing education in heterogeneous schools : Theory and application* (pp. 69-108). Ramat-Gan, Israel : Bar-Ilan University Press.
- Miller, N., Pedersen, W. C., Earleywine, M., & Pollock, V. E. (2003). A theoretical model of triggered displaced aggression. *Personality and Social Psychology Review*, **7**, 75-97.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246. (Ogawa, T., Monchi, R., Kikuya, M., & Suzuki, N. (2000). Development of the general affect scale. *Japanese Journal of Psychology*, **71**, 241-246.)
- Pedersen, W. C. (2006). The impact of attributional processes on triggered displaced aggression. *Motivation and Emotion*, **30**, 75-87.
- Pedersen, W. C., Gonzales, C., & Miller, N. (2000). The moderating effect of triggering provocation on displaced aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 913-927.
- 田村 達・大淵健一 (2006). 非人間的ラベリングが攻撃行動に及ぼす影響：格闘TVゲームを用いた実験的検討 社会心理学研究, **22**, 165-171. (Tamura, T., & Ohbuchi, K. (2006). An experimental study of the effects of dehumanizing labels on aggressive behavior in a versus fighting video game situation. *Research in Social Psychology*, **22**, 165-171.)
- Vasquez, E. A., Denson, T. F., Pedersen, W. C., Stenstrom, D. M., & Miller, N. (2005). The moderating effect of trigger intensity on triggered displaced aggression. *Journal of Experimental Social Psychology*, **41**, 61-67.
- Vasquez, E. A., Ensari, N., Pedersen, W. C., Tan, R. Y., & Miller, N. (2007). Personalization and differentiation as moderators of triggered displaced aggression towards out-group targets. *European Journal of Social Psychology*, **37**, 297-319.
- Worchel, S., Hardy, T. W., & Hurley, R. (1976). The effects of commercial interruption of violent and nonviolent films on viewers' subsequent aggression. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 220-232.

(2007.5.10 受稿, 12.27 受理)

Status of Provocateur and Target, and Triggered Displaced Aggression

SYOTA TANNO (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, HIROSHIMA UNIVERSITY)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2008, 56, 182–192

Study 1 (participants : 128 university students : 68 men, 60 women, average age=20.25) applied the triggered displaced aggression paradigm (TDA ; Pedersen, Gonzales, & Miller, 2000) in a hypothetical situation, and confirmed its validity. Study 2 (participants : 243 university students : 75 men, 168 women ; average age=20.58) examined effects of the status of provocateur and target on triggered displaced aggression, utilizing a hypothetical situation in which the statuses of provocateur and target were senior, peer, or junior. The significant main effect of the status of the target indicated that the junior-target group exhibited stronger triggered displaced aggression than did the senior-target group. The significant interaction of the status of the provocateur and the target indicated the following : (a) in the peer-provocateur condition, the peer-target and junior-target groups exhibited stronger triggered displaced aggression than did the senior-target group, (b) in the junior-provocateur condition, the junior-target group exhibited stronger triggered displaced aggression than did the senior-target and peer-target groups, and (c) when a senior was the provocateur, the senior-target group exhibited stronger triggered displaced aggression than the senior-target group did when a peer or junior was the provocateur.

Key Words : aggression, displaced aggression, triggered displaced aggression, provocation, trigger